

2015. 2. 28

# 現代俳句千葉

116号

巻頭エッセイ

僕の先生 幹事 林 阿愚林



私の俳句の先生は鈴木昭一さんという人です。現代俳句協会入会の推薦人でもあります。でも私は鈴木先生にお会いしたことはありません。

私の俳句の始まりはネット句会からです。個人、団体を問わず色々な句会に投稿していました。ある個人のネット句会に小悟さんという人がいて色々な句を褒めたり貶したりしていました。ある個人のように、句会の書き込みやメールの交換をするようになりました。

一方、現代俳句協会のネット句会には鈴木昭一という人がいつも高得点を取っていました。私も投稿していましたが、まだまだでした。それでも或る年の年間ベスト十に入り、小悟さんこと鈴木昭一さんからメールにてお祝いの言葉があり、そこで鈴木先生は千葉県鎌ヶ谷在住であることを知りました。

熱爛や人脈という見えぬもの  
熱爛や素顔に戻る旅役者

昭一  
阿愚林

目次	
僕の先生 林 阿愚林	1
諸家近詠	2~4
私の感銘句	5~11
ひろば	12
津田沼研究句会報告	13
青葉研究句会報告	13
柏研究句会報告	14
新会員・会友紹介 図書紹介	15
会員・会友の近況	15
掲示板	16

千葉県現代俳句協会会報

ある年の現俳ネット句会にて一位、二位になった句です。先生と同じ時、同じ季語が並ぶなんて俳句を始めて最も嬉しかった事です。そんな際、先生から現代俳句協会の入会と津田沼句会へのお誘いがありました。その頃、千葉現俳の会長は村井和一さんと事務局長は大畑等さんだと知らされ、津田沼句会には是非参加したいと思いましたが、当時私の勤め先は東京都大田区東海にあり、津田沼まで一時間半かかりました。仕事を終えて午後六時の句会には到底間に合いません。それでも協会には入会しようとして先生にお願いしました。

入会の手続きを終え一度先生に会ってお礼を言いたいところの年の始めに先生宅に始めて電話しました。ところが先生は前年の大晦日に亡くなられていました。私は泣きました。直ぐに先生の自宅に行き、先生の遺影を見ました。先生は顔を見て見たのです。その年の春、私は何とか仕事の都合を付け津田沼句会に参加することにしましたのです。  
佐保姫の追っかけ小僧雲に乗る  
これが私の津田沼句会での最初の句です。今もなお僕は佐保姫ならぬ鈴木先生の追っかけ小僧なのかも知れません。先生と入れ替わりかかると津田沼句会に今も私はいます。

阿愚林

## 諸家近歌

炎天に畳を燃やす夷隅いづもかな  
夕顔や紙燭ともせよ弦鳴らせ  
枯蟪蛄目玉のおくに波頭  
とある日の節足動物なる枯葉  
備前長船二本の氷柱かな

坂間 恒子

一山は二幕目に入り花は葉に  
捨てきれぬ趣味のそれぞれ盆の月  
生ぎるつて年寄ることよ花芒  
穴まどいいつも道を行きなさい  
定まらぬ心九月の風が吹く

金澤 恵子

わたくしの鬱からころり枇杷の種  
暗くなる川の胸見て暑氣払い  
怪談の葛切りに誘われている  
こおろぎを暗夜行路に誘いこむ  
ささくれた孤独で月と遊ばんや

菊地 京子

粹に生き粹に逝きたる夏の蝶  
磨崖仏大日如来より秋蝶  
無より出で有より無へと秋暮るる  
空や空の名僧今日の月  
第三の矢の的外れ日脚伸ぶ

久保 筑峯

レノン忌のぼつと生まれし冬すみれ  
熱の身に布団の重き春星忌  
熱爛や雪の匂へる訛り聞く  
不義理して軒の氷柱の太りけり  
目刺の眼碧くひかりて寒波来る

近藤 栄治

風花の渚たとえば刹那という  
対岸をゆたかに温室の灯る  
セーターのさみしさ海に呼ばれてる  
ゆりかもめ無名の手の平にことば  
幻聴のそのまま鳥になる雪夜

市川 唯子

芒野や地中の気配穏しをり  
伝えたき事語りしやすがれ虫  
残菊や身の丈知りし佇まい  
ビル群の力消えゆく秋夕  
行く道の先見えぬ世や冬嵐

齋藤 溥子

無条件降伏します日向ぼこ  
日体大卒のごきぶり現わるる  
哲学はシンプルがいい蟬の殻  
家中にカレーの匂い夏休  
作戦名枯木の山を攀じ登れ

國分 三徳

始祖鳥に似たものを食べ年忘れ  
風花を仏陀の弟子に貰いけり  
私風の時計の中で眠るかな  
はぎすすき善人を抜け尼寺へ  
荒神のまなこは故郷冬ざくら

小林 実

水澄むや湖底に集落眠らせて  
言うなれば吾も蓑虫揺れており  
鱈にげいご言葉は時に刺をもつ  
ひとり身に門限はなし日脚伸ぶ  
出雲の空はまるで猫の目春時雨

國武 和子

断捨離に二章目のあり深む秋  
秋暑なるうぶけ屋本日閉店で  
夏大根下し損ねし千六本  
空の水道云いえて妙や秋微雨  
朝顔や塀かけあがる消防署

小出貴依子

冬ざくら母の化身でありしかな  
家系図に寒椿のみ咲かせおり  
足腰にどっかり冬が棲みつぎぬ  
冬紅葉去りゆく時間の置手紙  
極月やまな板の音饒舌に

小張 直子

芹なづな離して叩く五十年  
白梅のにほふ昭和の定食屋  
桃のかたちにつくシマの桃洗ふ  
原発の風くる村に芋を干す  
菊人形もののふは口閉ざす

川又 優

氣負わずに生きるひとり身かたつむり  
飛び石で繋がる本家夕鯛  
道祖神なかむつまじく夕焼ける  
ティータイム終えて菊師の目に戻る  
巻き戻す亡夫との時間大花野

斉藤すず子

野に伏して幾つのきのう牛に虻  
花冷えの水に水足す遊びかな  
薫風を持ち帰るなら縄電車  
過呼吸がすこし泰山木の花  
鶴飛ぶ正装を解くようにな

黒澤 雅代

## 諸家近歌

加倉井允子

寒さにもドルにも慣れてアベニューへ  
極楽へ迫る朝寝のオルゴール  
欺きは神話のはじめ蒲の花  
日脚伸ぶ介護に暮るる女にも  
朝の露アンドロメダの涙めく

楠井 収

人間って何て面倒かなかなか  
一人だけ似てない次男星祭  
秋刀魚臭う隣は越してきたばかり  
成人の日嫁に出さぬとの日記  
立ち詰めめの夫の実家や黄鵪鶉

北野 耕太

久留里線冬ひたむきにワンマンカー  
野猿きて賑やかなりし寒の明  
鍵かけぬ田舎ぐらしや寒すずめ  
老人が間引かれそうに寒波くる  
小春日や村の駐在いつも留守

小出 治重

動乱の気配昂る紅葉道  
春未だ力尽きたる大日輪  
深緑を潜りて蒼き雲に乗る  
人生の大きなしこり腹背に  
次の世の生活設計柿大樹

加藤 法子

父も石母もまた石木菟が鳴く  
寒月光ひりひりと田に亀裂  
立春大吉たちまち鍋焦がす  
見てくれる筈ふらここを押してやる  
春夕焼厭きれば帰る三輪車

太田 涼子

春待つや二人心のひとり旅  
梅雨寒や声だしそうなデスマスク  
色変えぬ大王松の城下町  
藁を焼く煙たなびく竹の春  
銀杏の落つるを待つて集会所

飯島 治蝶

秋寂びし余りに軽き友の骨  
デイスカッション生徒秋晴の空のもと  
芒原上空高き青天井  
秋祭露店の射的に孫真顔  
冠雪の富士山くつきり秋日和

池田 和人

鯛焼きの体温高き包み紙  
目黒にはさして用なし初秋刀魚  
ジョン・フォード以後出番なく馬肥ゆる  
飲み代に足が出てゐし円朝忌  
働きて働きていま藤寝椅子

小河原清江

蝶隠る森の深さを見ら畏れ  
夕焼や余生に欲しき返り点  
群とんぼ命を繋ぐ岸辺あり  
十三夜濡れて影濃き木のベンチ  
アラビア文字右より書かれ穴まどひ

東 國人

闇汁の中より秘密保護法案  
曲がつている鉄筋憲法記念の日  
父の日の母の見ている沖の沖  
捨てに行く亡父の布団仏桑花  
初時雨平等という観覧車

植原 安治

立春寒波母に甲羅のごときもの  
付け睫毛して白詰草に歩み寄る  
馬の眸のどの眼のなかも青嶺  
父の日を青い絵具で塗りつぶす  
大僧正生姜の匂いしていたり

久保さちを

初句会脳の海馬の動き出す  
ヒッチコックの鳥にはなれず寒鴉  
笹鳴は我に在りし少年期  
戦場の匂ひは知らず梅の花  
正論は何時も疎まれ懐手

小林 雪枝

うららかやここで休めと石がある  
ボタン一つあとは退屈春の風  
電話番号が夏の嵐の海にさまよう  
二階から咳降りてきて地下へ行く  
目が覚めたところがこの世シクラメン

柏井 笙

濁り酒棘あることばグイと飲む  
街騒をすっぽり包み雪しんしん  
身の内の右に左に行々子  
万華鏡あふれだしたる冬銀河  
大蓮に座して極楽浄土 夢

坂本千恵子

歌留多とる娘のかいな白かりし  
お年玉小さき順に手がのびる  
安房国分寺天平語る臥竜梅  
洋上に雄雄しき富士の黄昏る  
菜の花が一番似合う総の国

## 諸家近歌

坂本 正夫

芒に穂出でて太古の主めく  
 狼よ原子炉捨身の人が廃す  
 米作る人に初日は意志であり  
 秋茄子家族制度を憧るる  
 師らしきことや働きすぎと秋に逝く

倉田たへ子

青葉風不思議な空間持ち来る  
 営みはいつものように夏の月  
 語尾上がる話しことばやさくらんぼ  
 犬ふぐり踏みて銀河に遊ぶかな  
 真空の都に自在寒鴉

小高 稔

煌めきし宇宙を指揮す寒昂  
 大白鳥水紋起てど動かざる  
 底冷えや赤提灯に誘われる  
 冬満月玄関の靴数並ぶ  
 コーヒーに時間を過ごす雪催

越野 雄治

ユーラシアの果ての軒端の唐辛子  
 下総の月夜に太るけむり茸  
 石膏は徐々に固まり木の実落つ  
 冴ゆる夜のギリシャのワイン零したる  
 コインロッカーそれぞれの冬を持ち

加納ひでこ

人間ウオッチング莞爾べにちよろぎ  
 雪女郎の夜晰しんと奥の齒  
 風冷たいか太閤とも遊女とも  
 艶めかし金泥仏さま冬流星  
 春水たどり森と陽と原発無無

北村 妍二

裂けた石榴に敗戦の日があつた  
 ゲートルと軍靴の響き未枯るる  
 爆心地までの坂道蚯蚓鳴く  
 ラヂオ体操終るや捕虫網走る  
 つつつつつ つつつ つつと石叩き

川井 吉二

花石露や宿は岬の突外れ  
 枯蟻螂日だまりの日を盗みをり  
 老人のお洒落昭和を重ね着る  
 笹子鳴く藪の芯射る日ざしかな  
 椿落つ震へてをりぬ筆の先

小野 裕文

水仙花話好きとは知らざりき  
 歩く鳥走る鳥いて冬干渴  
 ぼつてりと修正インクぼたん雪  
 歯車がはずれ勤労感謝の日  
 猫のいる冬至の塀に日暮来る

川上 典子

いい人が全開になる小春の日  
 ソムリエに注がれている冬の恋  
 木枯が残していったフランスパン  
 雑煮餅小さく切りて母の椀  
 ドーナツの穴の向うは春の街

小野 功

夕暮に吐息かさねる紫木蓮  
 草笛の音色はたしか相聞歌  
 花すすき記憶の糸を解いてゆく  
 真白な嘘もうひとつ帰る花  
 九条の壊されそうに大寒波

小林 俊子

春曉の呪文唱える風の穴  
 天地の風の一滴野の桜  
 星涼し鬱の面数掬い取る  
 歩を合わせくる父と母草紅葉  
 枯葦の暮色に重き波頭

金子 敏

裸木の孤高の影を引き絞る  
 山眠る眠らぬ鳥を懐に  
 蠟燭の灯心ぢごと年詰まる  
 風花や声降りて来る滑り台  
 七味より一味がよろし女正月

金田めぐみ

一徹の果てに道あり文化の日  
 遠き潮騒十二月八日かな  
 柚子湯して貧しきことを忘れいし  
 どか雪の多し地球が病んでいる  
 着ぶくれて未だ短き導火線

小野富美子

芽起しの雨や二台で余る米  
 風光る保育器の子に名がついて  
 風あれば風の形にミモザの黄  
 菜の花や屋根を重ねて漁師町  
 桜葉降る枅酒の角に塩

近藤 幸子

落ち葉踏めばやさしきものの伝わり来  
 凍蝶の紙片のように吹かれをり  
 下萌やラヴェルのポレロ鳴り始む  
 花仰ぎ今朝のわたしの鏡とす  
 スーツとふ鎧を着けし炎暑かな

私の感銘句

檜垣 梧樓

皴の手で一人のための胡瓜揉む  
 爆心柱きみ渾身の新樹なり  
 介添の刀自おぼつかな七五三  
 今日遠く桜まみれの舫い船  
 青とかげ振り向きさまの剽軽  
 三伏のはさまハレー・タビッドソン  
 春の夢より覚めてまたヒトのまま  
 カシラナンコツ墨堤の櫻騷  
 猫の鼻拭いてやるなり桜桃忌  
 薔薇真紅睫の長い人という  
 介添の刀自おぼつかな七五三

作者名 号頁

高田 柴秋 112 3  
 高木 一恵 112 3  
 田中 喜翔 112 4  
 徳吉洋二郎 113 5  
 なかもと淑子 113 5  
 藤井 遥 113 6  
 宮本美津江 114 2  
 林 阿愚林 114 4  
 イザベル真央 115 4  
 岩崎 令子 115 6  
 田中 喜翔

岩尾 可見

地震の国富士に背高泡立草  
 タざくら背骨に指の気配せり  
 青とかげ振り向きさまの剽軽  
 じゃんけんほんごうしか出さぬつくしんぼ  
 大花火ゆつくりと闇崩れたり  
 蒟蒻を千切つてふやす嘆きかな

白井 春こ 112 3  
 下村 洋子 112 4  
 なかもと淑子 113 5  
 平木智恵子 113 7  
 森 章 114 3  
 横須賀洋子 114 4

ざぶざぶと卵の花が咲く郷界  
 貴種流離譚桜しべ降り敷きる  
 上つて下つて女を捨てて滝の正面

三苦 知夫 114 4  
 荒井 玲 115 4  
 大畑 等 115 6  
 三浦 侃 115 9  
 荒井 玲  
 貴種流離譚はどんな意味なんだろうかと辞書  
 を引いてみると「貴い家柄の英雄が本郷を離れ  
 て流浪し、苦難を動物や女性の助けなどで克服  
 してゆく話」とのこと。

流浪しているのだから、時には桜の木の下で  
 寝たこともあったでしょう。  
 そう思うと「桜蕊が敷き詰める」がピタリと  
 嵌っていると思います。

小野 功

白薔薇の白の矜恃にたじろぎぬ  
 まどろみはやがて飴色祭笛  
 人日の真白き闇にはぐれおり  
 十二月八日燃えないゴミを出す  
 桃の花帰りもこの道通らんせ  
 嘘泣きを覚えはじめた夏の帯  
 上つて下つて女を捨てて滝の正面  
 鳥渡るころか埴輪の泣くころか  
 まだ誰のものでもあらぬ木の実降る  
 大根をつくれ銃弾つくらずに  
 鳥渡るころか埴輪の泣くころか  
 簡明なフリーズの中に自分自身の想いがあり  
 良い、若干、作爲的？それが故に魅力的である。  
 季語の働き方が生々として伝わってくる。埴  
 輪鳴くでなく、泣くとした処が、この句を一層  
 引立てている。

田中 正恵 112 4  
 寺田美津江 112 4  
 長井 寛 112 4  
 吉岡 一三 113 3  
 藤田 富江 113 7  
 山端かすみ 114 3  
 大畑 等 114 6  
 細根 栗 115 2  
 塩野谷 仁 115 2  
 吉野 精 115 7  
 細根 栗

吟行の良さが如実に表現されており、私が懂  
 れをいだく一句である。

大塚 弘毅

話の種尽きてお開き女正月  
 バーチャルのこの世に住みて蓬摘む  
 秘密法座視するままに冬の蝶  
 虎落笛老いに第三反抗期  
 書きかけの稿を横目の夜食かな  
 色褪せし千人針や敗戦忌  
 福逃げぬやうに抱えて福袋  
 新茶くみつくづく欲しき両隣  
 夏大根飴色に煮え加齢臭  
 爽やかな出会いのあとはいつも風  
 書きかけの稿を横目の夜食かな  
 急いで書きかけの原稿、投函するまでは気になつて、夜食を食べながらも、近くにおいて目をちらちら走らせながらチェックし思いめぐらす。ありふれたことだが、その状況、心理を上手に表現している。

井上けい子

たぶん死は冬のさくらのようにくる  
 白薔薇の白の矜恃にたじろぎぬ  
 死の灰は壇にありけり遠霞  
 冬鴉笑っていない眼が並ぶ  
 寂光の花は風なり風は花  
 真葛原軍馬残ラズ帰還セズ  
 能面を裏返しても太郎月  
 罪深き人に恋せよ鴛鴦の水  
 手袋へ孤独の夢を詰めている

高田 柴秋 112 4  
 青木 一夫 115 4  
 実籾 繁 114 2  
 根岸 ナツ 113 6  
 藤井 稜雨 113 6  
 高橋 節夫 112 3  
 高田 柴秋 112 3  
 長浜 聰子 112 3  
 並木 邑人 112 2  
 椿 良松 112 2  
 國武 和子 112 2  
 直江 裕子 112 2  
 田中 正恵 112 4  
 津高里永子 113 5  
 保坂ミエ子 113 6  
 細根 栗 113 7  
 吉岡 一三 114 3  
 門谷 杜人 114 3  
 藤田 守啓 114 4  
 興津 恭子 115 6

まだ何か言いたき極寒の晴れ 小川トシ子 115 6  
まだ何か言いたき極寒の晴れ 小川トシ子

人は死ぬとき意識はどのようになっているの  
だろうか。殆どの人が言い残した事があるので  
はないだろうか。

己れの死も含めて微妙な死者への想いが滲む  
好句。  
「寒の晴れ」が救いになっている。

秋谷 菊野

鉄橋や記憶のように来る電車 蛭名 節昌 115 4  
満月の迷つて曲がる島前路 イザベル真央 115 4  
忘れないための消しゴム原爆忌 秋尾 敏 115 4

ザックより取り出すルーベ茸狩り 大川富美代 115 5  
災天をどすと象の土踏まず 岡田 淑子 115 5

空豆の莢父母の庇護ありし頃 近江喜代子 115 5  
くるつと過去へまわる鉄棒雲の峰 石井紀美子 115 5

食卓にひらくパソコン色鳥来 石井 浩美 115 6  
ケイタイもスマホも持たぬ小鳥来る 岡田 春人 115 6

みどりの日回游魚のように銀座 小川トシ子 115 6  
空豆の莢父母の庇護ありし頃 近江喜代子

我が家は空豆農家である。五月半ばになると  
収穫に忙しい。空豆を剥くと、莢の中の白い毛  
に、まだ湿り毛が残っている。剥く時は機械的  
に剥いていく。初めて世の中に出た空豆は、選  
別され袋に入れられて出荷されてゆく。「父母  
の庇護ありし頃」という表現は、古典的で格調  
高い。「頃」と言い切っているのが、小気味良  
い。自分を覆ってくれていた莢の中の白いふか  
ふかのベッドがなくなつたことを、清々しくよ  
んでいる。

岡崎 翠

たぶん死は冬のさくらのようにくる 直江 裕子 112 2  
湯上りの素足がよろし天の川 中澤 一紅 112 2

皺の手で一人のための胡瓜揉む 高田 柴秋 112 3  
流れつつ澄みゆく水や山頭火 徳吉洋二郎 113 5

空つぽの運河五月の樹が騒ぐ 松澤 龍一 113 7  
万緑やちからいっばい汽笛鳴り 山村 則子 114 3

今日の貌今日使い切り白木槿 山口 夕紀 114 4  
忘れないための消しゴム原爆忌 秋尾 敏 115 4

影はみな足より伸びて雲の峰 内田 庵茂 115 4  
鯛雲のこして夜のきてるたり 石井 浩美 115 6

たぶん死は冬のさくらのようにくる 直江 裕子  
人生を達成した心にしみる句である。  
死が突然に来る人、長く床につく人、それぞれ  
を寿命と云う。作者は桜の花が季節になると咲  
くように、花も悲しいが予測するとすれば、冬  
のさくらの花と云った。

「たぶん」に得もいわれぬ味がある。

久保 筑峯

爆心柱きみ渾身の新樹なり 高木 一恵 112 3  
海じゅうのセシウムを呑む大海鼠 長井 寛 112 4

戦争の廊下無数の寒卵 榎垣 梧樓 113 5  
空という重き泰山木の花 細根 栞 113 7

目刺焼く昭和の色に焦げるまで 松本 静頭 113 7  
向日葵たち戦の前に立ちふさぐ 吉野 精 114 2

原発を使わぬ時間蝉しぐれ 吉岡 一三 114 3  
灌落ちて水のかたちに水の僧 門谷 杜人 114 3

忘れないための消しゴム原爆忌 秋尾 敏 115 4  
ふんだんに飲める水あり原爆忌 井上きよ美 115 5

戦争の廊下無数の寒卵 榎垣 梧樓

昭和十四年、渡邊白泉の無季俳句「戦争が廊  
下の奥に立ってゐた」は有名。同十五年、軍国  
主義の台頭で治安維持法違反により京大俳句事  
件で摘発、執筆禁止。その後、俳壇との交流を  
断つ。最近、さいたま市の公民館が市民の俳句  
「梅雨空に『9条守れ』の女性デモ」を月報に  
載せなかったという。これは、下からの自粛の  
形である。特定秘密保護法、集団的自衛権の行  
使の閣議決定での憲法解釈の変更。戦争への足  
音が聞こえる。作品は、戦争の漠然とした不安  
を詠む。

たぶん死は冬のさくらのようにくる 直江 裕子 112 2  
一斉に飛ばす飛行機春よ来い 中村 棹舟 112 4

秋澄むやマイシユキンらは行列す 榎垣 梧樓 113 5  
世の中は男とおんな櫻騒 久保さちを 113 6

嘘泣きを覚えはじめた夏の帯 山端かすみ 114 3  
蝉しぐれ昭和の傷の残る石 山中とみ子 114 3

余花の時いちばん遠くへかくれんぼ 山中 葛子 114 3  
寒月にいちばん近い玩具箱 門谷 杜人 114 3

古傷のめそめそ揺れる蛸蚪の紐 横須賀洋子 114 4  
これからは不良老人はたた神 藤田 守啓 114 4

秋澄むやマイシユキンらは行列す 榎垣 梧樓  
マイシユキン侯爵はドスエフスキの長編  
「白痴」の主人公。無邪気でキリストのような  
「本当に美しい人間」だが、激しい気性の女性  
ナスターシャとの恋に巻き込まれ、悲劇を迎え  
る。(スーパード辞林)とある。  
そんなマイシユキンのような人物なんて居る  
のだろうか。無邪気で本当に美しい人間。実は

吉田 耕史

人間界に疲れ切った人々が行列をなし、無気力で歩いている姿なのか。秋の澄んだ町に溢れる目的を失なった人々。文明への皮肉だ。

東 國人

- 痴呆美の国作らんか四方の春 並木 邑人 112 2
- 白いページ桜吹雪に空けておく 中村 冬美 113 5
- 円でなく丸とも違う春の夜 廣谷 幸子 113 6
- コンピニでたむろしている余寒 星野 一恵 113 6
- 春愁や夢を入れおく器がない 山崎 文子 114 2
- 蟻死なばたちまち蟻が喰いつくす 山中 葛子 114 3
- 夏雲に押されてアモの端にゐる しんがりへ涙腺ゆるむ体育日 石崎多寿子 115 4
- 断片のような復興だから亀が鳴く 秋葉 紅陽 115 4
- 清濁を合わせ飲む世の鯉跳ねる 明石春潮子 115 5
- しんがりへ涙腺ゆるむ体育日 三浦 侃 115 9
- 運動会は、スポーツの得意な者にとつては最高のイベントである。しかし、走るが遅く不得意の子もいる。今ある子が、その子なりに一生懸命にゴールを目指し、一人遅れてしんがりですべて走っている。その姿には拍手とともに、なんとなく心を動かすものがあり、涙が自然と滲んでくる。懸命に走る子と、それを見守る作者の温かい心情が、ほのぼのと浮かんでくる佳句であると感した。

加藤 法子

- 杉山は発火寸前春疾風 國武 和子 112 2
- 墓穴を出てひかえめに生きていく 椿 良松 112 2
- 牡丹の芽育てわたしはジェネリック 長浜 聰子 112 3
- 一枚の仕切もなくて年始め 長井 寛 112 4
- 今日遠く桜まみれの舫い船 徳吉洋二郎 113 5

ハイエナの見え隠れせし桜時  
万緑の沸点過ぎれば風になる  
向日葵たち戦の前に立ちふさぐ  
メロン切るとの神経を断ちますか  
蟻地獄に落ちてしまった記憶

保坂 末子

- 席譲られるなんて忽ち冬銀河 種村 佑子 112 3
- 鳥雲に波郷を辿る向島 星野 一恵 113 6
- 麦踏みをつぎの父の速さかな 渡辺 澄 114 2
- 蝉しぐれ昭和の傷の残る石 山中とみ子 114 3
- 爽やかな出会いのあとはいつも風引く張って開ける缶詰多喜二の忌 青木 一夫 115 4
- ふんだんに飲める水あり原爆忌 相原 一枝 115 4
- 蟻地獄に落ちてしまった記憶 井上きよ美 115 5
- まだ夏の残れる帽子洗いおり 石井紀美子 115 5
- 箸使ふものだけ食べる生身魂 岡田 淑子 115 5
- 席譲られるなんて忽ち冬銀河 岡田 春人 115 6
- 種村 佑子

小出 治重

- 歩かねば肉体怖し苔に花 山中 葛子 114 3
- 詫び状がまだ届かない敗戦日 秋谷 菊野 115 4
- 雲の花野に永遠の子どもたち 秋尾 敏 115 4
- たましいの蒼く乾きて落し水 明石春潮子 115 5
- 衣更え身の内何も変えられず 大川 園子 115 5

一言に縛られている蟻の列  
霧裊天上人となる一瞬  
死ぬと言ふ大きな課題さくらんぼ  
万骨の覚め始めたる花筏  
住み古りて人を見る目がある蜥蜴

普川 洋

- 空井戸を覗けば遠い空だった 鳴戸 奈菜 112 2
- ブルースの青の隙間へ小鳥来る 芝崎 梓 112 3
- 誤字脱字脱わたくしや熱帯夜 高木 一恵 112 3
- 七月の静物牛の頭蓋骨 吉岡 一三 114 3
- 金魚死す全身打撲らしい 横須賀洋子 114 4
- 妖怪の踊り疲れて昼寝かな 林 阿愚林 114 4
- いびき博士は優しく生きて白桔梗 藤田 守啓 114 4
- 忘れないための消しゴム原爆忌 秋尾 敏 115 4
- 死ぬと言ふ大きな課題さくらんぼ 岡田美英子 115 6
- 空缶を蹴つて花野を明るくす 石井 浩美 115 6
- ブルースの青の隙間へ小鳥来る 芝崎 梓

椎名 鳳人

- 初春やこれも転生逆さ富士 内藤 富雪 113 5
- 詩の匂い平和の匂い文字涼し 実籾 繁 114 2

青葉闇陶のみみづく目覚めけり 山崎 幸子 114 2  
 地球儀の中はからっぽば蟬時雨 森 章 114 3  
 望郷の万の力が雲の峰 田村 隆雄 114 3  
 はまなすや海女の墓標の潮湿り 山中とみ子 114 3  
 蟻死なばたちまち蟻が喰いつくす 山中 葛子 114 3  
 麦秋や遂に生家のがらんどろ 前田 清方 114 4  
 秋天は好青年のようなもの 青木 一夫 115 4  
 人間を見ざる鶉の目の荒野かな 大畑 等 115 6

詩の匂い平和の匂い文字涼し 実 繁  
 詩作の方法の一つに「美を詠う」という重要な要素があるが、作者は詩を読んで理屈や言葉では説明出来ない一種の美を感じたのだろう。それを詩の匂いと言ったのである。そして流れるような文字には涼しささえ感じられ、平和に対する感謝の念でいっぱいなのである。

國分 二徳

啓蟄や出会いがしらに静電気 長浜 聰子 112 3  
 茄子漬を丸かじりして子沢山 中川 広子 113 5  
 明日よりはバスの来ぬ道犬ふぐり 股野 久子 113 7  
 行き先はどこでもいいの春帽子 保坂 末子 113 7  
 金魚死す全身打撲らしい 横須賀洋子 114 4  
 誕生日毎シャリンと嘸んでおしまい 柳 恵子 114 4  
 香水一滴きつかけは軽めに 林 阿愚林 114 4  
 狐の子使いこなせぬ二枚舌 岩尾 可見 115 4  
 満月の迷って曲がる島路 伊ザベル真央 115 4  
 上品な妻無花果のかはをむく 岡田 春人 115 6

誕生日毎シャリンと嘸んでおしまい 柳 恵子  
 思わず微笑んでしまいました。大人になると誕生祝なんてしない人も多いでしょう。それでも今日は私の誕生日なんだとふと思ひ出すこと

もありです。  
 苺を買ってきて、ハイこれが誕生祝。一粒口に入れて納得してしまふ。そんな軽妙なお洒落な一句でした。  
 シャリンが効いていますね。

馬淵 津枝

戸隠いま余白の色に蕎麦の花 國武 和子 112 2  
 墓穴を出てひかえめに生きていく 椿 良松 112 2  
 あのうわさ蜥蜴の尻尾から洩れて 高野 礼子 112 3  
 影を集めて晩秋のすべり台 徳吉洋二郎 113 5  
 五月の陽頬に返してネックレス 久保さちを 113 6  
 空という重さ泰山木の花 細根 栞 113 7  
 万緑の沸点過ぎれば風になる 山崎 幸子 114 2  
 墓守みな昭和一桁花茨 三苦 知夫 114 4  
 忘れないための消しゴム原爆忌 秋尾 敏 115 4  
 断片のような復興だから亀が鳴く 明石春潮子 115 5

影を集めて晩秋のすべり台 徳吉洋二郎  
 掲句はあくまでも晩秋と言う季節感に焦点を絞っているのではないだろうか。  
 影の伸びやかさとすべり台の取り合せが妙に寂寥感を漂わせている。少しづつ過ぎ去って行く時間に反応したところだけを詠みとっただけで、晩秋の感触が伝わってくるのも無駄な言葉が一切ないからであろう。  
 景が視覚だけでなく皮膚感覚でも受け入れられそうな作品。

伊ザベル真央

砂利道に砂利足している日の盛り 永井アイ子 112 2  
 静電気のような友だち水温む 長浜 聰子 112 3  
 空蟬になつてゐるのに本気の眼 種村 佑子 112 3

汗の引くまで山頂を一人占 西澤 照雄 113 5  
 保育器の宇宙船めく星月夜 近江喜代子 113 5  
 忘却を促すように雛の笑み 水沼 幸子 113 7  
 薔薇満開少しばかりの羞恥心 山崎 幸子 114 2  
 歩かねば肉体怖し苔に花 山中 葛子 114 3  
 メロン切るとの神経を断ちますか 横須賀洋子 114 4  
 忘れないための消しゴム原爆忌 秋尾 敏 115 4  
 忘却を促すように雛の笑み 水沼 幸子

房総のどこかで雛人形を戸外の石段に、大量に並べたイベントを見たことがある。雨が降ったり風が吹いたらどうするのか。雛をさらすことに異和感を覚えた。  
 とは言え我家の雛人形は、納戸のロフトから何年も降すことができない。人形や道具の箱には幼い娘達の絵や近況を毎年書き込むのが行事だった。  
 だが、戦後生れの私の小さな雛飾りは嫁入り前に庭で燃やした。すべて忘却雛の笑み。

松本 静顕

空井戸を覗けば遠い空だった 鳴戸 奈菜 112 2  
 こおろぎの横顔人間探求派 芝崎 梓 112 3  
 白玉やさらり難病語りし友 根岸 ナツ 113 6  
 三伏のはさまハーレー・タビッドソン 藤井 遥 113 6  
 十二月八日消すこと出来るポールペン 鈴木 陽子 113 7  
 八月のあの日あるとき無重力 若林 佐嗣 114 2  
 揚羽蝶不意に止まるは鳴咽のよう 山崎 政江 114 4  
 生きるとは今光ること草蜚 相原 一枝 115 4  
 帰れない人が見てゐる秋夕焼 浦野 五郎 115 4  
 城攻めは大手門より千の蟬 秋山 冷子 115 6



三伏のはさまハーレー・ダビッドソン 藤井 遥

定年後ハーレー・ダビッドソンを乗りまわしている旧友の話を思い出した。初老の男達が仲間を募りオートバイで山河を疾走する。その気分は何物にも替えがたいと目を輝かす友人の姿がほほえましかった。  
若々しい乗物と上五の措辞が素晴らしいひびきを醸し出し否応もなく読み手の共感を呼ぶ。

山崎 幸子

こおろぎの横顔人間探求派 芝崎 梓 112 3  
一枚の仕切もなくて年始め 長井 寛 112 4  
鳥雲に波郷を辿る向島 星野 一恵 113 6  
空という重さ泰山木の花 細根 栗 113 7  
空つぼの運河五月の樹が騒ぐ 松澤 龍一 113 7  
歩かねば肉体怖し苔に花 山中 葛子 114 3  
雨の日は眉も引かずに振花 山崎 政江 114 4  
影はみな足より伸びて雲の峰 内田 庵茂 115 4  
蟻地獄に落ちてしまった記憶 石井紀美子 115 5  
手袋へ孤独の夢を詰めている 興津 恭子 115 6  
蟻地獄に落ちてしまった記憶 石井紀美子

蟻地獄とは薄羽蜉蝣の幼虫が住む砂地にある挿鉢状の穴である。その穴の中に記憶を落とすたと詠う。

現実には記憶が何かも不明、それを穴に落せるかも不明。けれどそのような些事には拘らない。今までの生涯の中で、 unnecessary 記憶は、蟻地獄の中に落ちて食われ消滅せよと、中七の強さで納得する。

特異な季語の斡旋で面白味を出した一級の心象句である。

阿部 良治

天のここの地のこと知らず銀河澄む 高野 春子 112 4  
一枚の仕切もなくて年始め 長井 寛 112 4  
白玉やさらり難病語りし友 根岸 ナツ 113 6  
傘干してあり白樺咲いており 笹沼 郁夫 113 6  
灯を消してその夜は妣といる臙 保坂 末子 113 7  
饒舌の痴呆症とやシクラメン 山中 頼子 114 2  
富士山を胴上げにする夏木立 吉田 耕史 114 4  
夏の果潰せしボトル戻る音 内田 庵茂 115 4  
衣更え身の内何も変えられず 大川 園子 115 5  
落蟬の一声闇を深くする 秋山 冷子 115 6

青木 一夫

たぶん死は冬のさくらのようにくる 直江 裕子 112 2  
冬鴉笑っていない眼が並ぶ 保坂ミエ子 113 6  
靴先で男が野火の向き変える 保坂 末子 113 7  
麦踏みつつぎの父の遠さかな 渡辺 澄 114 2  
山びこは二十歳の声よ夏帽子 山端かすみ 114 3  
蝉しぐれ昭和の傷の残る石 山中とみ子 114 3  
さぶざぶと卵の花が咲く郷界 三苦 知夫 114 4  
夏雲に押されてデモの端にある 石崎多寿子 115 4  
足湯して足置いてくる十三夜 岡田 淑子 115 5  
万骨の覚め始めたる花筏 大畑 等 115 6

足湯して足置いてくる十三夜 岡田 淑子

足湯をしながら美しい十三夜を見ている。きつと身も心も極楽の境地にいるのだろう。やがて疲れもほぐれて火照った足を拭き、足湯に十三夜の月を残し、後ろ髪を引かれるように月をあとにする、未練なのか足を残してきたという形象化が感動を伝えてくれている。

國武 和子

誰も知らない枯蓮の骨が哭く 袴田 菊子 112 2  
あのうわさ蜥蜴の尻尾から洩れて 高野 礼子 112 3  
まんじゅうが確かにあつた夜の秋 白井 春こ 112 3  
沖繩忌ふたてに分かれ鶴走る 高橋 公子 112 3  
振り向けばまたそこに母寒月光 橋口 久子 113 5  
雪吊りの蒼穹を負う男振り 保坂ミエ子 113 6  
空の疵さがしつづける秋の蝶 青木 一夫 115 4  
七転びぐらいは平気鬼栄螺 相原 一枝 115 4  
子が駆ける母のひら大花野 石井紀美子 115 5  
桜葉ふるふるとおい日の背中 小川トシ子 115 6  
雪吊りの蒼穹を負う男振り 保坂ミエ子

一読、金沢兼六園の景色が眼前に広がる。雪吊り終えた松の堂々たる姿を、男振りと感じ

受された。蛇の目傘を広げたような縄の線状が、松の枝振り緑の色と相まって、誠に美しい景である。私は雪吊り作業をしている場面にも出会ったことがあり、庭師のきびきびした動きや、自信に満ちた落着きに、頼母しきを感じた。こうした姿にも男振りの言葉がびつたりだと思ふ。この句はリズムもよく、中七で景が大きく力強くなっている。

竹内 絵視

開くまで祈り続ける白つばき 椿 良松 112 2  
火の牙を野に放ちけり秘密法 並木 邑人 112 2  
天空に城あり少年ヴィオラ弾く 内藤 富雪 113 5  
流れつつ澄みゆく水や山頭火 徳吉洋二郎 113 5  
戦争の廊下無数の寒卵 檜垣 梧樓 113 5  
十六夜の影歩き出す宇治拾遺 羽村美和子 113 7  
御輿揉む万の袴りの手拍子に 村田 珠子 114 3

泉渾々老いたエリーゼのために  
子が駆ける母のてのひら大花野  
波音が言霊となり沖繩忌

秋尾 敏 115 4  
石井紀美子 115 5  
神作 仁子 115 9

十六夜の影歩き出す宇治拾遺  
この宇治拾遺物語は十三世紀の始め編者未詳  
で、天竺・震旦・本朝にわたる仏教的なものか  
ら諧謔的なものもある多彩な説話集で、又十六  
夜は皎皎とした満月と異りためらう様に後れて  
出てくるので、物語集の奥行の深さにびったり  
適合している。

日野 葉子

一徹も生きる力よ七竈  
柚子は黄に首沙汰は水影のよう  
一日を使い果たして冬至風呂  
新涼や古語辞典など開かせる  
紋白蝶止まりたい木と避けたい木  
八月のあの日あのととき無重力  
夏負けてふわふわむりのように居る  
秋天は好青年のようなもの  
ふと湧きし言葉秋風さらいけり  
乱舞する蛍の闇の静けさよ

國武 和子 112 2  
田口満代子 112 3  
中村 棹舟 112 4  
福田志津子 113 6  
増田 元子 113 7  
若林 佐嗣 114 2  
山口 夕紀 114 4  
青木 一夫 115 4  
伊東 靖子 115 5  
飯島 昭子 115 6

高橋富久江

能面に納まらぬ顎沓え返る  
どかしてもどけても瓦礫春遅し  
万緑やちからいつぱい汽笛鳴り  
背伸びして手を振るナース凌霄花  
菫蕪を千切つてふやす嘆きかな  
灯台より地球瞰下ろす大南風  
影はみな足より伸びて雲の峰

西澤 繁子 113 5  
藤井 稜雨 113 6  
山村 則子 114 3  
八木 邦夫 114 3  
横須賀洋子 114 4  
三苦 知夫 114 4  
内田 庵茂 115 4

秋天は好青年のようなもの  
妹よコスモスよこのしたたかき  
忘れないための消しゴム原爆忌  
背伸びして手を振るナース凌霄花

青木 一夫 115 4  
秋谷 菊野 115 4  
秋尾 敏 115 4  
八木 邦夫

作者あるいは身近の方が長い療養生活をされ  
ていたのでしょう。仲良くなった看護師さんに  
とって退院という別れは嬉しくも一寸した淋し  
さもつきまとう。  
今後会う機会も多分ない姿を少しでも目に停  
めておこうと背伸びまでして手を振る姿は送ら  
れる側も嬉しい。

さよならするように揺れる凌霄の蔓、明るい  
花の色、一日咲けば潔く落花する蔓性落葉樹の  
性質を生かした句は明日への方向付を黙示して  
いる。

瀬尾 教子

夏休み腹這いになって読むカフカ  
霧重き砂丘滅びの坂いくつ  
橋渡り切らずがよしと思ふ秋  
裸木のひっそりと待つ野望かな  
くるっと過去へまわる鉄棒雲の峰  
かたくなに雲寄せ付けず望の月  
越境へ許可なく迂る蛇の舌  
城攻めは大手門より千の蟬  
補聴器を欲しがっている蟬の穴  
まだ何か言いたき極寒の晴れ

秋谷 菊野 115 4  
秋尾 敏 115 4  
明石春潮子 115 5  
大川 園子 115 5  
石井紀美子 115 5  
新井 秋芳 115 5  
井上きよ美 115 5  
秋山 冷子 115 6  
秋山 勝男 115 6  
小川トシ子 115 6  
鳴戸 奈菜 112 2  
長浜 聰子 112 3

伊藤 希眸

年とれば影も年とる柳の木  
房総の先端を削ぐ冬怒涛

古いという桃いろのとき鳥帰る  
十二月八日消すこと出来るポールベン  
詩の匂い平和の匂い文字涼し  
蟻死なばたちまち蟻が喰いつくす  
ゴスベルの少しの狂気年を越す  
足湯して足置いてくる十三夜  
人間を見ざる鵜の目の荒野かな  
竹とんぼとんぼとなりて野に遊ぶ  
足湯して足置いてくる十三夜

普川 洋 113 5  
鈴木 陽子 113 7  
実籾 繁 114 2  
山中 葛子 114 3  
藤田 守啓 114 4  
岡田 淑子 115 5  
大畑 等 115 6  
岡山 敦子 115 6

この頃は野田辺りにも温泉を掘り足湯がある  
と聞く。作者の年令を思えば時には歩行も隨な  
らない事も。そんな時か偶然か足湯をすること  
になった。ゆっくり足湯に浸った足は痛さも重  
たさも無くなった。別人の足取りに、前の足は  
何処へ？ 置いて来てしまったとユーモア溢れ  
る言葉が胸に。十三夜の美しさ静かさ相俟つ  
て難しい言葉は使わずとも奥深い句になっている。  
年齢を感じさせない楽しい作品である。

岡田 淑子

沖繩忌ふたてに分かれ鶴走る  
鳥雲に波郷を辿る向島  
行き先はどこでもいいの春帽子  
原爆忌水平線に瑕一つ  
麦踏みつづきの父の遠さかな  
やぼったい母情もまじり花は葉に  
影はみな足より伸びて雲の峰  
猫の鼻拭いてやるなり桜桃忌  
風景の一つが歪み冬の沼  
万骨の覚め始めたる花筏

高橋 公子 112 3  
星野 一恵 113 6  
保坂 末子 113 7  
実籾 繁 114 2  
渡辺 澄 114 2  
山中 葛子 114 3  
内田 庵茂 115 4  
イザヘル真央 115 4  
岩崎 令子 115 6  
大畑 等 115 6

藤井 遥まよ

砂利道に砂利足している日の盛り  
満月のまだまだ太るこちして  
流れつつ澄みゆく水や山頭火  
鳥の来て鳥の影来て十二月  
ナイターの負けて二人は貝になる  
余花の時にちばん遠くへかくれんぼ  
水引草揺れねば何も起らない  
ちくちくと麦稈帽子遠き日よ  
ゴスペルの少しの狂気年を越す  
帰れない人が見てゐる秋夕焼  
ゴスペルの少しの狂気年を越す  
藤田 守啓 114 4  
浦野 五郎 115 4

ゴスペル・ソングの湧き上がる興奮に身をゆ  
だねつつも、そこに「少しの狂気」を感じてい  
る作者である。

神の福音と生身の吾と。少しの狂気と隣合せ  
に暮しているのが日常であるのかも知れない。

齊藤すず子

話の種尽きてお開き女正月  
一日を使い果たして冬至風呂  
ふらこや此の町を出て雲に乗る  
靴先で男が野火の向き変える  
新樹燃え道祖神も燃えていた  
歩かねば肉体怖し苔に花  
尺蠖の尺とるたびの武者震い  
のぞく子がいない通草の口ぱっくり  
帰れない人が見てゐる秋夕焼  
名月にうさぎの切手貼っており  
國武 和子 112 2  
中村 棹舟 112 4  
藤岡 尚子 113 6  
保坂 末子 113 7  
吉野 精 114 2  
山中 葛子 114 3  
村田 珠子 114 3  
秋谷 菊野 115 4  
浦野 五郎 115 4  
岡田 淑子 115 5

黒澤 雅代

たぶん死は冬のさくらのようにくる  
空井戸を覗けば遠い空だった  
何か思えよ桜の実落ちてくる  
鶴渡るこよい音なく河荒れて  
席譲られるなんて忽ち冬銀河  
この道はここに出るのか花蘇枋  
空という重き泰山木の花  
踏切と夕日が好きで卒業す  
唐辛しの逆立つ赤をわたくしす  
まだ夏の残れる帽子洗いおり  
たかん死は冬のさくらのようにくる  
直江 裕子 112 2  
鳴戸 奈菜 112 2  
高野 礼子 112 3  
田口満代子 112 3  
種村 佑子 112 3  
西澤 照雄 113 5  
細根 栞 113 7  
森村 文子 114 2  
柳 恵子 114 4  
岡田 淑子 115 5

死は生のあるものに確実に来る。誰もが知っ  
ている当り前のことだが、誰にもその終りは予  
測できない。願わくは冬のさくらに密やか  
に、けれど綺麗に終わりたいと思う。万人のその  
心と作者の願望とが「くる」の一言に籠められ  
ている。

菅ノ谷文字

原爆忌水平線に瑕一つ  
青き踏むマグマ溜りの国にいて  
土筆んほまだ空っぽのランドセル  
蝉しぐれ昭和の傷の残る石  
古傷のめそめそ揺れる蛸蚪の紐  
爽やかな出会いのあとはいつも風  
足湯して足置いてくる十三夜  
冬の蜂忍者のごとく腕に在り  
落蟬の一声闇を深くする  
旅立ちには口紅ひとつ冬の蝶  
実村 繁 114 2  
渡邊 廣子 114 2  
山端かすみ 114 3  
山中とみ子 114 3  
横須賀洋子 114 4  
青木 一夫 115 4  
岡田 淑子 115 5  
井上きよ美 115 5  
秋山 冷子 115 6  
岡田美美子 115 6

土筆んほまだ空っぽのランドセル 山端かすみ

入学前に買ってもらったピカピカなランドセ  
ル。入学式が待ちきれずに、思わずランドセル  
を背負って、外に駆け出したのでしよう。今は  
昔と違い、ランドセルの色も赤と黒の他、カラ  
フルな色がたくさんあり、想像するだけで、楽  
しくなってきました。土筆んほからかわいさ、あ  
どけなさが伝わり、ほのぼのと暖かな気持ちにな  
ります。

金子 未完

話の種尽きてお開き女正月  
たぶん死は冬のさくらのようにくる  
影を集めて晩秋のすべり台  
向う気をつよさが東風をはね返す  
地虫出づ見習期間は三ヶ月  
自閉してででむし時機を待ちおりぬ  
メロン切るとの神経を断ちますか  
蝉の鳴く木を中流と思いきり  
妹よコスモスよこのしたたかさ  
生きるとは今光ること草蜚  
妹よコスモスよこのしたたかさ  
秋谷 菊野  
「妹よ」は良い響きである。歌謡曲でも妹を  
テーマにした歌（かぐや姫など）が多い。でも  
この場合は、遅しくなった女性像を詠っている  
のだと思います。コスモスは、か弱く見えても  
強い花です。戦後、強くなったのは、〇〇と〇  
〇言われるが、平成世代の女性は、本当したた  
かだ。一九九七年男女雇用均等法改正され、働  
く女性が増え、肉食系の女性が多くなった。男  
性はますます草食化、ほんと弱くなった。

國武 和子 112 2  
直江 裕子 112 2  
徳吉洋二郎 113 5  
星野 一恵 113 6  
保坂 末子 113 7  
実村 繁 114 2  
横須賀洋子 114 4  
青木 一夫 115 4  
秋谷 菊野 115 4  
相原 一枝 115 4

ひろば

■第百四十一回野田俳句連盟秋季大会

平成二十六年九月二十一日(日)に野田市興風会館に於いて第百四十一回野田俳句連盟秋季大会が開かれた。出席者六十六名、欠席投句者二十一名。席題は「秋の水」。

入賞者 (三句合点) 代表句

市長賞

どの駅も誰かの故郷いわし雲 千葉 智司

議長賞

菊人形血の通うまで着せてゆく 保坂 末子

教育長賞

ひとつ位みんな罪持つ割柘榴 戸邊 光一

連盟賞

母は子を子は空を見る大花野 高野 春子

五位

足湯して足置いてくる秋日和 岡田 淑子

六位

掃除機の名前はルンバ秋高し 鈴木 岑夫

七位

秋水に触れた指からたそがれる 鈴木 郁子

八位

集落は同姓ばかり秋の水 増田 元子

九位

ひっそりと秋を束ねて耳よ 山崎 政江

十位

鬼の子の糸一本の思考力 佐々木幸子

■市原市文化祭俳句大会

十一月三日、市原市俳句協会創立50周年記念俳句大会が開催された。兼題の部は県内の一〇七人から495句、小中高生徒による第6回文芸コンクールでは7校から387句の応募があり、当日の席題句会は60人の出席をもって実施された。(並木邑人記)

☆兼題の部/銀河・秋桜・雑詠三句一組

市原市長賞

銀漢やガウヂの塔なほ未完 松本 正子

市原市俳句協会賞

打ち明けてよりの沈黙天の川 大場 美月

市議会議長賞

コスモスの風の上なる観覧車 加藤 法子

教育長賞

紅茶葉のゆるくほぐれて虫の秋 大内田芳乃

文化祭実行委員長賞

山の湯に沈み銀河へまぎれけり 中村 翔

☆文芸コンクール/俳句の部

市原市長賞 加茂中3年 積田 美穂

ひまわりと私の笑顔はいい勝負 吉野 有音

市原市長賞 鶴舞桜が丘高1年 岩本怜衣流

君だけの笑顔はしけるソーダ水 岩本怜衣流

市俳句協会賞 湿津中3年 岩本怜衣流

清水や薫る紫陽花雨後のみち 岩本怜衣流

市俳句協会賞 市原緑高1年 杉原 真

思い出の分だけ黒い日焼けだね

■千葉・県民芸術祭第56回千葉県俳句大会

第56回千葉県俳句大会が十月十九日(日)に県内各地から多くの俳句作家が参集し、千葉県文化会館に於いて盛大に開催された。

◆雑詠の部入賞者

千葉県知事賞 市川 大河内卓之

花だより花の切手を貼り足して

千葉県議会議長賞 君津 石井紀美子

万緑のところどころに力瘤

千葉県教育長賞 我孫子 島崎 桜湖

灯を暗くして虫売の座りをり

千葉県俳句作家協会会長賞 我孫子 森田 和代

一呼吸して噴水の起ち上る

千葉日報社賞 君津 広上 あい

目の端に子供を繋ぎ浅瀬掘る

千葉市観光協会会長賞 木更津 加藤 法子

風鈴やさびしきものに肘枕

◆席題の部 席題「罽雲」「木守柿」

【入賞句二句合計点と代表句一句】

千葉市長賞 青空へぼんと落款木守柿 27点 菊地 光子

千葉市議会議長賞 罽雲男だまって飯を喰う 14点 細根 栗

千葉市教育長賞 山国は山を楯とし木守柿 14点 原 瞳子

千葉テレビ放送賞 老いは日々新しきもの罽雲 13点 茶谷 静子

千葉市文化連盟会長賞 村中の待つ産声や木守柿 12点 福川 政美

□□津田沼研究句会報告□□

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二七〇回 平成二十六年十一月十一日(火)

司会 大畑 等

鬼灯の熟れすぎている神谷パー 岡田 淑子  
 数えても仕方なきこと木の実落つ 白木 暢子  
 流れ星妻の手引いて消え去りぬ 大塚 弘毅  
 鯨より仏壇までを測りおり 大畑 等  
 秋風の時計の中で眠るかな 小林 実  
 やすやすと紅葉感染して眠る 山中 葛子  
 それぞれが善人面の鯛獲り 林 阿愚林  
 とき尽きて頭痛肩凝り菊人形 横須賀洋子  
 関東からは貸切りバスで神の旅 金子 未完  
 菊背負う女出て来て森に去る 吉野 精  
 烏瓜今年はそこが君の居場所 大村 錦子  
 座り込む影踏んでゆく夜学生 佐藤 晏行  
 洋傘をさし侍たちの時雨 檜垣 梧樓  
 蟪蛄の沈思黙考仏顔 村上 澄子  
 妹は普段着なりし七五三 後藤 章  
 体操の輪の小さかり冬に入る 股野 久子  
 猫の退屈秋の日を裏返す 徳吉洋二郎  
 破れ蓮覚悟の程の百体 なかもと淑子  
 スイッチが入る夕日の紅葉谿 楠見 恵子

●第二七一回 平成二十六年十二月九日(火)

司会 大畑 等

引越しの後に残りし冬日かな 深山きんぎょ  
 はやぶさの旅立ち白菜かがやけり 岡田 淑子  
 投票へ大根の火をとめてから 大村 錦子

すでに鬼女ダム湖のぼれる蔦紅葉

気まぐれに地球は生れ霜柱

十二月八日吊り革に手が残る

ボロ市のボンチャイナの皿の音

冬すばる時計を失くしてからの恋

とんがってくる一對の耳神渡し

季語季感どうでもいいよ雑草だ

手を入れしところ膨らむ裘

冬の蝶輪郭線を消してゆく

十二月八日早朝トイレに呼ばれけり

七七忌万両愛でて客の立つ

健さんの冬「宮川」がよく似合ふ

狼にはなれずみんな羊になる

三鷹駅銀杏落葉の匂いと人と

冬日向パンに寄る猫忍び足

翅閉じて開いて月の蝶になる

冬ざれやエスカレーター上る列

開戦日ゆつくり登る無縁坂

大畑 等

小林 実

林 阿愚林

徳吉洋二郎

イザベル真央

山中 葛子

佐藤 晏行

吉野 精

後藤 章

白木 暢子

横須賀洋子

大塚 弘毅

檜垣 梧樓

金子 未完

なかもと淑子

股野 久子

楠見 恵子

前島きんや

村上 澄子

●第二七二回 平成二十七年一月十三日(火)

司会 山中 葛子

初席へ人形焼を抱いて来し 佐藤 晏行  
 軍港で右手左手霜焼けに 小林 実  
 存問の音の力り力り嫁が君 檜垣 梧樓  
 初詣神はビタミン注射する 吉野 精  
 寒満月いらぬ鍵の捨てどころ 横須賀洋子  
 振り出しは東京駅の初鏡 岡田 淑子  
 ボール蹴る健やか私の年男 なかもと淑子

大海の受胎告知や初入日

月の優先順位決めてあり

書初めの余白はみだすめでたさよ

冬銀河こよなく水と油かな

冬眠は獣に吾に冬休み

道真をうつけと思ふ探梅行

おおかみを檻に見しより檻の人

新聞に空欄ありし雪おんな

子の育つ時間の流れ春遠し

曇り空松を飾りて仮設小屋

四海波誰が誰を守る明けの春

思い出す字画のいくつ初バズル

天寿とは誰方の言葉雑煮盛る

富士山ヘスカイツリーの御慶かな

初護摩の炎を揺らし大太鼓

徳吉洋二郎

イザベル真央

村上 澄子

山中 葛子

後藤 章

林 阿愚林

大畑 等

楠見 恵子

白木 暢子

大塚 弘毅

金子 未完

股野 久子

大村 錦子

深山きんぎょ

前島きんや

□□青葉研究句会報告□□

(於：千葉市民会館・第五会議室)

●第四十一回 (平成二十六年十一月二十七日)

司会 並木 邑人

平穩は脆し大根煮えてくる 馬淵 津枝  
 こんな夜は紅いマフラーして眠る 細根 栗  
 ふる里の炬燵に背骨抜かれけり 石井紀美子  
 地球儀のどこかが飢えて冬の鵞 芝崎 梓  
 れきしとは概ね戦史稲架を組む 並木 邑人  
 皇帝ダリア兵士は今も外つ国に 山崎 幸子  
 小流れのみみぢ一葉は奔流へ 三須 民恵  
 かもめかもめ湾口の空使いきる 椿 良松

散る紅葉散らぬ紅葉も真つ赤なり  
 触れ込みは昔鳴らしたちゃんちゃんこ  
 山頭火なれずしぐれの外にいる  
 西の市気合乗りたる手締め打つ  
 ポジョレヌーボ眠り足りない顔ばかり  
 真つ新たなところで会ひし冬桜  
 菊を手を寝返り打つておりしかな  
 葉研堀啖呵を切つて一の酉  
 荒神のまなこは故郷冬ざくら  
 駅ビルの混迷を出て風邪心地

大塚 弘毅  
 加藤 法子  
 細野 一敏  
 小高 稔  
 徳吉洋二郎  
 鈴木まんぼう  
 大畑 等  
 矢野 忠男  
 小林 実  
 長浜 聰子

●第四十二回 (平成二十六年十二月二十五日)

司会 細根 栞

ダイビングしそうな夕日亀山湖  
 雪催いくるぶし二つ持ち歩く  
 迂闊にも足跡残す雪女  
 大根の穴を増やして村残す  
 黄昏は抹香鯨に逢いに行く  
 サンドイッチマン新宿西口片しぐれ  
 みほとけも背中はずびし冬日向  
 聖夜かな半分に折るチョコレート  
 冬紅葉家紋金箔鬼瓦  
 村に来る白鳥はもう仲間です  
 只ごとのやうな月日や青木の実  
 日に三度白菜刻み妻想ふ  
 十二月八日目と足拒む達磨  
 変になるあ変になる室の花  
 手をふれば手をふりかえす小春かな  
 水鏡写る色葉の自己主張  
 天と地の阿吽の呼吸聖夜の灯

三須 民恵  
 芝崎 梓  
 鈴木まんぼう  
 石井紀美子  
 大畑 等  
 徳吉洋二郎  
 長浜 聰子  
 加藤 法子  
 矢野 忠男  
 樺 良松  
 山崎 幸子  
 大塚 弘毅  
 細野 一敏  
 小林 実  
 細根 栞  
 小高 稔  
 馬淵 津枝

●第四十三回 (平成二十七年一月二十四日)

司会 三須 民恵

急がずに生き数の子の塩を抜く  
 鏡餅妻はいつでも上にいる  
 彫りおこす仏のころ冬木の芽  
 煮凝りや沈黙という誉め言葉  
 この先案ず蜜入りの冬林檎  
 寒紅やさみしくないと言えば嘘  
 初風に乗せたきものに恋心  
 寒椿二階の他人が爪飛ばす  
 裸木の木肌ポロポロ日が落ちる  
 雪激し胸の緞帳下りてより  
 祈る掌がまだあり冬の陽が甘い  
 晩学や推して敲いて年新た  
 冬ざくら赤子の過去を知る女  
 水面鏡情眠むさぼる鯉二匹  
 独り居の暮れの六畳虎落笛  
 縄跳びの縄は地を打ち日脚伸ぶ  
 上汐へ木遣口説の冴にけり

加藤 法子  
 細野 一敏  
 細根 栞  
 石井紀美子  
 樺 良松  
 馬淵 津枝  
 鈴木まんぼう  
 大畑 等  
 三須 民恵  
 長浜 聰子  
 芝崎 梓  
 徳吉洋二郎  
 小林 実  
 大塚 弘毅  
 小高 稔  
 山崎 幸子  
 矢野 忠男

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー」2階)

●第三十一回 (平成二十六年十二月十三日)

司会 松澤 龍一

失言の刺残りたる焚火跡  
 手付かずの防災グッズ冬ぬくし  
 極月の平均台に少女がひとり  
 あられ散る初老婦人の裾さばき  
 ふくろうよ誰も落葉を拾わない

榎木 きよ  
 小林 俊子  
 大畑 等  
 伊藤 希眸  
 イザベル真央

●第三十二回 (平成二十七年一月十日)

司会 長井 寛

次々と一瞬生れ冬花火  
 鯰大根大盛基敵の二人  
 凍蝶の虫ピンなどはもう要らぬ  
 裸木の取込む空の無数なり  
 鋼鉄の川の咬き魚は水に  
 京人參紅濃く盛らる淑気かな  
 看板の文字はねあがる寒灯下  
 しんしんと第九のなかを鮫泳ぐ  
 牡蠣すする女に小さき喉ほとけ

小林 実  
 岡田 春人  
 榎木 きよ  
 下村 洋子  
 長井 寛  
 佐藤 鈴子  
 小林 俊子  
 大畑 等  
 松澤 龍一

●第三十三回 (平成二十七年二月七日)

司会 長井 寛

白衣のパンダの双子春立ちぬ  
 雪の降る予感明日の蔵の屋根  
 極月の機罐車捨つる己の湯  
 仙台虫喰自分の世話でせいっぱい  
 電球を半分替へる建国日  
 大寒の筑波叩けば石の音  
 古池に溺るるかわず水面鏡  
 春一番匿くまい通す二枚舌

佐藤 鈴子  
 野口 京子  
 大畑 等  
 イザベル真央  
 岡田 春人  
 松澤 龍一  
 長井 寛  
 榎木 きよ

## 新会員・会友紹介

佐倉市染井野 大見 充子(会員)

(推薦者 小林 実)

過去形の寂しさに似てせみしぐれ

冬の星黒いマリアとその子供

目覚めれば霧の中なる白き馬

船橋市田喜野井 池田 博臣(会員)

(推薦者 鈴木 瑩子)

八月の上海無風砂小砂利

外つ国の三角蒸しパン沖縄忌

地下鉄に素足の女熱気球

千葉市稲毛区 高橋 由樹(会員)

(推薦者 大牧 広)

気仙沼の吹き深し浮いてこい

鯛曇浜の男よ下向くな

みちのくのしづもる海へ草矢うつ

木更津市東太田 水戸 吐玉(会員)

(推薦者 大畑 等)

ゆるやかな関係風と花すみれ

春闘や携帯電話に犬の顔

涙拭くことを覚えて一年生

佐倉市宮ノ台 中條 雅夫(会員)

(推薦者 山中 葛子)

わがものは畑いちまい冬の草

耕やときに背伸ばし雲を追ふ

放つ畑露の芽ひとつ残しけり

## ■ 総会・俳句大会のお知らせ

既にお知らせした通り

三月十五日(日)に千葉市文化センター

に於いて総会・俳句大会が開催されます。

総 会 十時半開催

俳句大会 十三時より(席題発表は十時)

是非ご参加下さい。

## 図書紹介

■ 『囀りの椅子』 上野 紫泉

平成二十六年十一月十三日 文學の森

大島のふはりと浮きて春隣

葉桜の力を借りる娘の受胎

半夏生咲く女の鬢のけしどころ

## 《会員・会友の近況》

・元旦早々の雪には驚きましたが大雪でなく  
ほっとしました。所属している公民館の俳  
句サークルでは年に二回程、俳句通信と銘

打って冊子を発行しています。全員参加の  
冊子の発行は格調高く、継続は嬉しく思ひ  
ます。毎回趣向を凝らした提案に感心致し、

身の引きしまる思いと同時に文才のなさで  
四苦八苦致しております。最後に、今年の

平穩を願って已みません。(金澤 恵子)

・昨年は参加する俳誌「青垣」に「河東碧梧  
桐論」を連載しました。その後、評論から

少し遠ざかっていましたが、今年は季の言  
葉と季語というテーマで考えてみたいと思っ  
ています。(近藤 栄治)

・諸家近詠を楽しみに拝読させて頂いており  
ます。いろいろの句のスタイルが勉強にな  
ります。八十三歳になりますが、新しい句を

作りたいと頑張っています。(國分 三徳)

・俳句が出来なくて鬱病一歩手前です。  
(小林 実)

・毎月現代俳句の届くのをたのしみにしてい  
ます。去年の十一月に弟を亡くし私の師千

葉信子先生から「柿熟るる弟のゆく一枚扉」  
の句を頂きました。(川又 優)

・九十一才になります。(加倉井允子)

・昨年十二月十三日に「四街道市芸術文化団  
体連絡協議会」創立二十周年記念式典を開

催、《特別功労賞》を貰いました。  
第二代会長・現在は顧問。(小出 重治)

・日々是俳句三昧、ご自由に「飯島治蝶の俳  
句ブログ」にお立ち寄り下さい。(飯島 治蝶)

・去る一月中旬体調を崩し、数日間ぼうつと  
して居りました。今では復調して普通の生

活に戻ることができました。(小高 稔)

・知人に誘われて始めた俳句、一向に進歩し  
ませんが、しばらく続けていこうとやって

います。えらい物に取りつかれたものだ：という思いも少し。(池田 博臣)

・現代俳句インターネット句会を縁に入会させていただき、地区での活動にも参加しようと思っておりますが、妻の病の状態が自由が利かず予定が組めない状況になりました。従って当面は今のネット句会を続けるのみの活動となります。(水戸 吐玉)

掲示板

《会員・会友異動》

●入会 (会員) 高橋文哉、三宅たくみ、

黒川秀夫、松戸 圭、水野禮子、

永井奈々、前島きんや、深山きんぎよ、

吉川たけを

●退会 (会員) 西澤照雄、野復美智子、

浜地久美子、平川常廻、藤倉哲夫、

森田祥絵、柳 恵子、山口智子

●転入 森須 蘭、高遠朱音(東京都区より)

●移転 太田洋子(松戸市新松戸北へ)、

遠藤寛子(船橋市東船橋へ)、

やち坊主(千葉市美浜区へ)

《平成二十六年第四回幹事会》

日時 平成二十六年十一月二十五日(火)

場所 プラザ菜の花 三階 「菜の花」

議題

- 一、平成二十六年度秋の吟行会の結果について
- 二、平成二十七年俳句大会・作品募集について
- 三、第一一五号会報について
- 四、現代俳句協会(本部)の動向について
- 五、三十五周年記念俳句大会について
- 六、平成二十七年春の吟行会について
- 七、各研究句会の状況について
- 八、その他
- 九、次会幹事会 平成二十七年  
第一回幹事会 一月二十七日  
第二回幹事会 五月十九日

《平成二十七年第一回幹事会》

日時 平成二十七年一月二十七日(火)

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、平成二十七年総会・俳句大会・懇親会について
- 二、新幹事の推薦について
- 三、平成二十七年総会資料について
- 四、俳句大会応募の経過報告
- 五、第一一六号会報について
- 六、平成二十七年春の吟行会について
- 七、今年度の企画・活動について  
(三十五周年記念俳句大会 他)
- 八、現代俳句協会(本部)の動向について
- 九、「現代俳句千葉」合本の報告
- 十、その他

□事務局・編集部だより□

●三月十五日(日)の定期総会・俳句大会が近づいて参りました。春の風邪など召されぬようご自愛ください。

●四月二十九日(水・祝日)には、春の吟行会が開催されます。今回は野田市の清水公園が舞台です。会場は公園内の聚楽館。お誘い合わせて、ぜひご参加ください。

●「諸家近詠」は名簿から順番に投稿のお願いをしております。一年半に一回は依頼が行くペースです。一年半以上もなんの依頼も無い方は事務局にご連絡ください。

●「私の感銘句」には昨年より三割方多いご投稿がありました。ありがとうございます。今号より到着順で掲載をして行きます。

<p>現代俳句千葉 第一一六号 平成二十七年二月二十八日発行</p>	<p>発行人 千葉県現代俳句協会 会長 大畑 等</p> <p>現代俳句千葉編集部 〒278-0037 野田市野田六六五番地 松澤 龍一</p> <p>千葉県現代俳句協会事務局 〒270-1471 船橋市小室町二八〇四 高木 一恵</p> <p>電話 〇四七-四五七-二九一二 FAX 〇四七-四五七-二九七二</p>
--	---